



この町で、この地で笑って老いたい ～そのために今すべきこと～

# 【まち協だより】

令和6年1月号

発行：山上まちづくりの会事務局

電話(FAX) 82-0933

## 山上まちづくりの会 組織改編・役員改選に向けて

役員運営委員会12月12日・常任委員会1月17日の報告

令和6年4月の総会に提出予定の山上まちづくりの会組織改編についてこれまで協議されたことを報告します。

- 広報部をなくし、広報業務は事務局(事務長・集落支援員)が行う。
- 厚生体育部をなくしますが、2年後に日南町体育祭が開催された場合は、現厚生体育部員の皆さんにも協力をあおぎ、選手を招集する。
- 日南町スポーツ協会(旧日南町体協)の各競技担当部員は山上まちづくりの会事務局直轄とし、日南町スポーツ協会主催大会などへの選手招集等を行う。会計処理はこれまで通り事務局が行う。予算名については「厚生体育部費」を改め「スポーツ協会事業費」などに変更することなどを今後の委員会で協議していく。(※種目はソフトバレーボール、ソフトテニス、卓球、バドミントンなど。)
- 地域振興部の副部長が2名だったが、他の部と同様に1名にする。

大まかな変更予定は以上ですが、広報部と厚生体育部をやめることで活動部が6から4に減少します。それに伴い災害時活動班組織図なども変わってきますが、詳細は2月の役員運営委員会で決定する予定です。人口減少と高齢化による組織改編になります。地域の皆様のご理解とご協力をよろしくお願いいたします。

## “山上教育の父”内藤岩雄さんの伝記を掲載するにあたって

令和6年は“山上教育の父”内藤岩雄さん 生誕150年の年にあたります。山上まちづくりの会事務局では、【まち協だより】令和6年1月号より裏面をつかって「小説 内藤岩雄」を掲載します。

掲載にあたっては内藤岩雄さんの親族 内藤浩海さま、発行者の株式会社クリエート上野さまに掲載承諾書をいただきました。誌面を借りて御礼申し上げます。

平成21年4月に日南小学校が開校してから16年ほどたちますが、山上地区の子ども達が内藤岩雄さんについて学ぶ機会はほとんどなくなりました。現在の小中高校生は知らない人も多いと思われます。この小説は小学校5年以上であれば読める文章にしています。低学年の子ども達には保護者の方が読み聞かせしていただけますか？ この小説を使って、家庭で子ども達に内藤岩雄さんや山上の歴史のことを語り継いでいただけたらと思います。原本『鳥取県子どものための伝記 第3巻 内藤岩雄』(※ひらがなが多い)は、山上地域振興センターに3冊ありますのでお貸してきます。まとめて読みたい方はご連絡ください。



53年前、昭和46年(1971)大入峠に再建された内藤岩雄さんの「錦着て帰る故郷の若葉かな」の句碑

### ～今後の会議予定～

役員運営委員会 2月16日(金)第1会議室

第19回 山上まちづくりの会総会 4月12日(金)第3会議室

## ぐず少年、内藤岩雄

ばたばたと、石段を駆け上がる足音と一緒に、「ぼんさん、ぼんさん、行きましようやあ」元氣のよい声が、庭中に響き渡ります。いつもの菊太郎の声です。「さあ、菊ちゃんが迎えに来なさつたよ。はよ出かけなさい」母親のひやくは、土間の隅に立っている岩雄に声をかけて、背中をゆすります。

岩雄は、のぞきこむようにしている母親をちらっと見ていましたが、それでも、「いつてまいります」というと、玄関の障子をしぶしぶあけて、出かけていきました。

ひやくは、菊太郎と並んで歩いて行く岩雄の小さな肩を見送りながら、「どうしてこんなにグズグズした子になったんだろう。あととりだというのに、困ったものだ。どうしたものだだろう」と、いつもの愚痴を繰り返すのでした。

岩雄の学校嫌いは大変なもので、朝起きたときからもう体調が悪いのです。着物を着替えるのも、顔を洗うのも、ご飯を食べるのも、すぐにグズグズしていて、ひやくに急ぎ立てられても、時間ばかりがかかるといいます。その様子は、両親には、学校を遅れるためわざと時間を引き延ばしているように見えるのでした。



内藤岩雄は、明治七年二月二十二日、日

野郡山上村(今の日南町)茶屋に、内藤義彦の長男として生まれました。この内藤家は、ずっと昔から続く神職(神社等の諸行事を行う)の家で、家の庭続きにある細屋神社の神主を務めていました。初代の釜太夫朝

俊という人は、出雲(島根県東部地方)の広瀬にある月山の殿様に仕えていた位の高い武士でした。尼子氏が毛利家によって滅ぼされた後、お家再興のために山中鹿之助と相談して、出雲と伯耆の国境に住んで、野山を開墾し戦いの時に必要な食事を用意していました。後に茶屋に移り住み、土地を開いて神社をつくった家と言われています。十七代目にあたる父の義彦は、とっても几帳面な性格で、身なりはもとより、家の内外の掃除、物の始末など、全てにきちんとした人でした。

こうした環境でしたから、小さいときから岩雄は、村の子供たちと一緒に遊ぶようなことはさせてもらえず、おとなが遊び相手のほかは、ひとり

で絵を描いたり土をいじったり、草や虫で遊んだりする毎日でした。

ですから、学校に集まってくる子供たちはほとんど知らない子でしたし、その上、先生はとても厳しく、遠慮なく叱りつけるのですから、岩雄にとつて学校が楽しいところであるはずがありません。

おまけに、学校は『矢原』という、普通の家を借りて、ほとんどそのまま使っていました。天井の広い六畳ほどの広さの部屋は、しみのついた壁と障子で仕切られて、暗く薄汚れてみえるのです。また、遊び場にあてられている庭も、普段神社の境内へと続く広い場所を遊び場にして、岩雄には、大変狭く思えて仕方ありません。

なんとか行かずにすませようとする岩雄を、父はつかまえて学校に送りだそうとしましたし、母は、なだめすかし、機嫌をとつてなんとか行かせようとしたが、そうされればされるほど岩雄は学校に行く気がしませんでした。

それでも、「ぼんさん、学校へ行きましようやあ」と庭で何度も繰り返し呼ぶ菊太郎の声を聞いていると、だんだん菊太郎にすまないような気がしてきて、しぶしぶながら出かけることになるのでした。